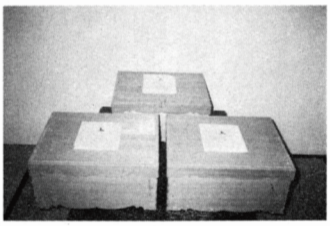
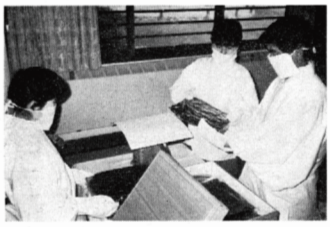
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311代
定価 一年送料共 1000円

玄界灘の新若布御献上

―厳寒の磯で採取―





皇居賢所、天皇・皇后両陛下並びに皇太子殿下・同妃殿下へ宗像七浦の荒磯で採取した、早春の若布の献上を申し上げる「若布献上の儀」は、去る二月二十四日葦津宮司外随行員一名が上京し無事執り行われた。

この「若布献上の儀」は昭和三十八年に宗像七浦の漁業関係者を中心とする「海洋神事奉賛会」が結成されて以来執り行なわれている当大社恒例の行事で今年で二十二回目を迎えた。

今年は異常寒波の為、若布の成育が心配されたが、二月十四日予定通り各漁業協同組合より丹誠こめて奉製された磯の香清々しい、濃緑の見事な若布が届けられた。

この若布は、二月初旬郡内各漁業協同組合員が寒風肌さす中、海に潜り刈り取り、真水で丁寧に洗浄し、天日で板乾しされたものである。

この届けられた若布を当大社で更に厳選をし、最良品を征目の杉の木箱に丁重に納め、斎館に厳重に保管された。

二月二十三日午前八時三十分、小雨にけぶる本殿に於いて、若布献上奉告祭を斎行、祭典終了後直ちに木箱を白布で包み奉持者一同福岡空港へ向った。

同空港では、出発に先だち当大社神職一名と巫女二名により、全日空スチュワーデス三名に献上若布を託す手渡しを行い十二時三十分発全日空二五二便で一行は東上した。

翌二十四日、前日の雨もあがり早春の暖かな日差しの中、一行は坂下門より皇居へ参内した。午前十時宮庁に於いて、侍従職を通じて、天皇・皇后両陛下に御献上申し上げた。その席にて、葦津宮司は「宗像七浦の漁民が真心込めて採取致しました早春の若布でございます。」と若布採取の模様を申し上げた。

引続き、宮下掌典補の御案内により吹上げ御苑に赴き、賢所に献上申し上げた後、宮中三殿参拝の栄誉に浴した。かくして、宮中での献上を無事終え皇居を退出した。

午前十一時、東宮御所へ参内した。皇太子殿下・同妃殿下におかれましてはアフリカ等二ケ国への公式ご訪問の出発を明日に控え慌しい雰囲気の中、綾村侍従にご面会し、若布の献上を申し上げ、一行は東宮御所を後にした。

ここに、宗像七浦漁民の真心の奉仕による本年度の玄海若布献上の儀式が滞りなく終了したのである。

尚、若布献上に際し、御協力下さいました、全日本空輸株式会社、出光興産株式会社、平和産業有限会社様を始め、多数の方々に厚く礼申し上げます。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二―三一（〒八一二）電話（〇九二）六五一―九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三四一―三三四一代／四番 三四三―三三四一番

「日の丸を仰ぐ心」

一月二十七日は国旗制定の日である。明治三年の同日。政府は太政官布告によって商船規則を公布し、その中で日章旗を国旗として、商船はこれを掲揚すべきことを指令し、国旗の寸法等をも定めた。今日では政府をはじめこの日をもって国旗制定日と考へてゐる。

日本に於ける日の丸の歴史は古い。すでに奈良朝より日像幟は朝賀の儀式に使はれ、その後日章は公用私用ともに使用された。戦国武将たちにも愛好され、御朱印船の船章ともなった。

幕末風雲急を告げるころ、水戸斉昭や島津斉彬らの要請がいれられ、安政元年七月、幕府は老中布告によって、日本総船印として白地に日の丸の旗を用ふることを通達した。これが日章旗を公に国旗と定めた初めである。明治三年の布告は、新政府の規則としてさらにこれを確認したものといへよう。

以後国旗の掲揚は国民の間に普及し、公の機関はいふまでもなく、各家々に於いても、祝祭日や各種の記念日にはこれを掲げて祝意を表はすのが習慣となり、風俗となった。出征兵士を送る駅頭にも、帰還兵士を迎へる埠頭にも日の丸があった。

○

ところが昭和二十年の敗戦により占領軍の命によって日章旗の掲揚は禁止され、それから四年間日本全土から日の丸が見られなくなる。国旗掲揚がマッカーサーの指令によって解禁されたのは昭和二十四年である。日本民族が永遠に忘れることのできない屈辱の日であった。

国旗掲揚は解禁になったものの、梅に桜にまた菊にいつも掲げた日の丸の昔日の風景は復活しなかった。敗戦によるショック、占領軍および追随者による日本攻撃は国民の国家意識を薄弱にし、国旗に対する尊敬の念、美意識を喪失させてしまったのであらうか。その後遺症は今日に及び、払拭されたとはいへない。

公立の機関では常時日章旗を掲げる所が多くなってゐるが、元日をはじめ国民の祝日に国旗を掲げる家はまだまだ少なく、それが祝日の風景をきはめてわびしいものにしてゐる。

学校ではどうであらうか。入学式や卒業式、運動会や周年行事の日にはこれを掲げる所が次第に多くなってきてゐる。ただ国旗に対する愛情の育成といふ点では未だしといはねばならぬ。

指導要領には「国民の祝日などにおいて儀式などを行う場合には、児童に対してこれらの祝日などの意義を理解させるとともに、国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」とある。望ましいぐらゐではその徹底は望めないし、国民の祝日に儀式などを行ふ学校はないので、国家の象徴としての国旗に対する尊敬の情を培ふ機会も実際にはないのである。指導要領の言葉は空文にひとしいと言ってよからう。

○

これまでに行はれた世論調査によっても、国民の大多数は日の丸を肯定し、愛着をもってゐる。日教組の一部にはこれを侵略戦争に結びつけて反対するものもゐるが極めて少数である。大多数国民が日章旗に対して肯定的であるのに、どうして掲揚率が低いのか、これは一考を要することではなからうか。国民をして掲揚をためらはせるものがあるならば、それを除去し、国民の素朴な感情が素直に表現されるやうな指導が工夫されなければならない。

NHKでは放送終了時に、日の丸を翻し君が代を奏してゐるが、そのやうな時間までテレビとつき合ってゐる人は少ない。朝の七時のニュースの初めとか、夜のNC9とかに映像を流せば、国民の国旗意識は著しく向上するに違ひない。また国旗掲揚率を高めるためには、国民の祝日を日の丸をもって祝ふにふさはしい祝祭日にすることも必要である。また国旗制定日を公に定めて祝ふことも、意識を高めるには大いに役立つことであらう。

日の丸ほど秀れた旗章はない。デザインとしても最高無比であることを専門のデザイナーたちも認めてゐる。

単純明決にして斬新であり、これにまさる意匠はどこにもない。そして白地は清潔を示し、赤く染めた日の丸は誠実をあらはす。日本国民はその精神を理想とし、日の丸を仰ぐことによって神州清潔の民たらんことを心に誓ってきた。

○

さて日の丸を見失った戦後の日本はどうなったか。日の丸を仰ぐことを止めるとともに、清潔の精神も誠実の倫理も喪失したといへないだらうか。

さらに日の丸の示す中心帰一意識、団結心をも失ふとすれば、日本国は、外敵の侵入をまたずして内部崩壊するであらう。日の丸を仰ぐことは日本の心を守ることであることを、国旗制定の日に当たり認識を新たにしたい。

神社新報より

第二七二回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

通り堂　木梨よしの
冬ざれの畑の中に際立ちて二列に並ぶキャベツの緑

吉　留　高山　僖子
わが友を伴い老い姉訪ぬれば姉のよろこび身より溢れる

原　町　塩川ハルコ
やわらかき陽ざしに庭の木犀は米粒ほどの新芽を抱きおり

田　熊　今村　重刀
甲子の年男なるわれの身に今年は何かよき事あらむ

福　間　広渡一寿軒
玄海の雄叫ぶ波にみのふ浜の玉競（せ）る海（あま）の子意気物凄し

吉　留　白木うめの
豆を煮て稱を蒸すなる裏庭のかまどに今日は芥を焼けり

王　丸　村山　菊代
落葉してさみしき梢に春を待つ新しき芽のすでにつきをり

原　町　八波　五月
切り張りの多き障子も目に馴れて今日新年を幼等と祝ぐ

武　丸　原田まつ代
夜半の雪庭の巨岩にさらさらと真白くつもり朝の冷えびえ

曲　天野トモエ
稀に見る雪景色さへ痛ましく有明鉱の惨事を思ふ

戸　畑　田中ハツセ
年を経て色の褪せた調度品グラバー邸の部屋になじめり

田　久　立花　勇雄
耳病みて聞こえすなりし秒針の音きこえきぬ立春のけふ

田　熊　鷲津かつ代
寒肥をやらむと堀りたる芍薬の赤き芽をもつ深き根方に

徳　重　石松やす子
悲なく年の初を迎え得たり帰れぬ母に藤膳をすゆ

鐘　崎　岩瀬　辰夫
可愛さは床の間にまで鉢並べ観葉植物ピンチの寒さに

大　島　中村さつき
夕月のかかりて昏るる屋根の上鵜飛びゆく寒々として

大　島　目原　節子
泥靴の毛布より出て出がるる八十三人目の遺体写りぬ

大　島　大島　勝代
原渡る風に吹かるる薄花光まとひて砲架とびゆく

大　島　屋形とみえ
春来れば一年生に進む孫の賀状届きぬ字も太太と

大　島　佐藤　八郎
自らを戒め乍らする禁酒やっと果しぬ長き三年

大　島　木田よしえ
おだやかな海に見ゆれどひとところ波は激しく磯に砕くる

大　島　田志　雅子
夜ふかく目の冴えくれば窓を打つ風音荒きに夫の船思う

大　島　藤田よし子
昏睡の兄訪ね来て足のむくみふるるは悲し老いたる吾れら

自由ケ丘　後藤君代
川べりのしぶきに氷る萱草が垂れて流れにきらめきあへり

福　間　中村　勇
逗留の長きに宿の菜にも厭き鰤の刺身隠して食らふ

田　熊　力丸　一郎
飛騨の山やままた山のつらなりて麓の里の灯火またたく

田　久　小方　実
納骨堂の受け付けとなれどそのかみの誉の家の消息知る人もなく

津　丸　古賀　文月
細雪（さざめゆき）降る梅の枝（え）にメジロ来ておしげもなしに蕾ついばむ

宮　田　片山　朔子
充ち足りる想いは胸に溢れつつ陽ざし明るき山陽路の帰途

津　丸　松尾　豊
吹雪く中一声高啼き裏庭の椿に潜る面白ありたり

東　郷　藤崎　辰子
乾麺の箱に蹲る仔ねずみのわれを見てゐる眼の清らかさ

武　丸　立石ろせ乃
夫逝きて荒れ放題の庭の隅木犀咲きてほのかに匂ふ

原　町　中村　幸
命終の人もあらむか病院の石の廊下の只に長くて

津屋崎　谷口　礼子
み葬（はふ）りの庭にすがれしあをい花黒き背動かず永雨ふる日に

深　田　中野　節子
地蔵まつる札所の路に出で来たり椎の実拾ふ落葉の中に

福　間　松尾　和子
裸木の空突く如き枝先にもずの止りてきと鳴きたりう

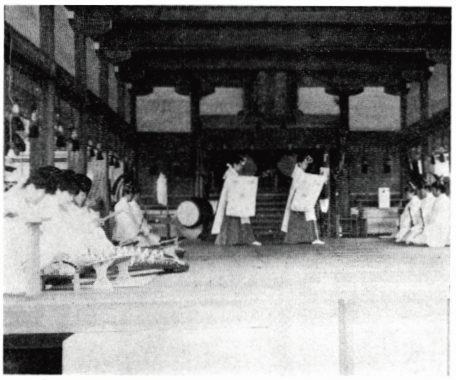
田　野　山口　和江
この次は花の頃よと帰りたる吾娘思いおり頼もしくなりしを

田　野　森　つるの
湯治する湯のさまざまが珍らしく泥筋滝砂と目替りに行く

田　野　山口　タキ
降る雪に葉のなき庭木に時ならぬ真白き花が咲き盛るなり

昭和五十九年度 紀元節祭（建国祭）厳粛に斎行さる

――皇紀二六四四年閏年甲子――



日本が統一国家と形成されたを以って「建国の日」と定め、建国記念の日として国家の祝祭日と定められた去る二月十一日午前十時、建国祭（旧紀元節祭）が、葦津宮司以下全神職奉仕、氏子崇敬者多数参列のもと盛大且つ厳粛裡に斎行された。

日本国家の建国については「日本書紀」に「神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと＝神武天皇）が国家を統一して、大和の橿原宮（かしわらのみや）に於いて、ハツクニシラススメラミコト（初代天皇のこと）として即位された」とあることによって、初代天皇である神武天皇の即位時を「日本国家建国の時」としている。

明治五年十一月五日、これまでの太陰暦に変って、太陽暦が採用されることになり、太政官布告により神武天皇の即位の年を「紀元元年（きげんがんねん）」として、二月十一日を「国家紀元の日」と定め、「紀元節（きげんせつ）」として「天長節（天皇誕生日）」と共に国家祝日と定めたのである。

紀元節奉祝歌として

雲にそびゆる高千穂の
高根おろしに草も木も
靡き伏しけり大御代を
仰ぐ今日こそ楽しけれ

と歌われたものである。

しかし、この「紀元節」も第二次世界大戦、太平洋戦争に於いての日本の敗戦によって、昭和二十二年に連合軍（GHQ）の勧告により廃止されたが、国民の「日本国家皇室の起源は是が非でも定めなくてはならない」という強い願望がみのり、昭和四十一年に政令により「建国記念の日」と名称を改め、再び国家の祝祭日の日と定められたのである。

昭和五十九年（西暦一九八四年）は、神武天皇即位紀元二千六百四十四年である。この紀元（皇紀）は、西暦に六六〇年を加えたもの、即ち西暦元年は紀元（皇紀）で六六〇年にあたる。

――◇――◇――

〝氏子崇敬者の皆様へ〟

国家の祝祭日の日には、必らず「国旗」（日の丸の旗）を掲揚して、日本国民としての誇りを持って、国家並に皇室の繁栄と安泰をお祝いしましょう。

〝鬼は外〟・〝福は内〟 節分祭盛大に斎行さる

―災難厄除・延命招福を祈念―

去る二月四日午前十時より、当大社祈願殿に於いて古式に則り厳粛に節分祭が斎行された。

当日は、年男は裃袴姿で参列、また寒さにも負けず地元玄海幼稚園児を始め、東部児童館（宗像市吉武）の良い子達百数十名が先生に引率され、又保護者も多数同伴の参列があり、厳かな祭典の中にも賑やかさが見られた。

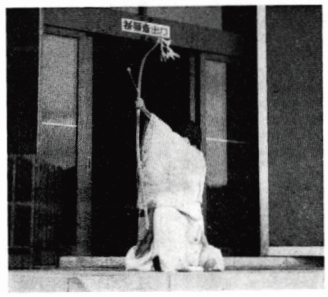
祭典に引続いて古代さながらに、祈願殿正面に於いて、弓に矢をつがえた二名の神職により〝鳴弦の儀〟が行われた。

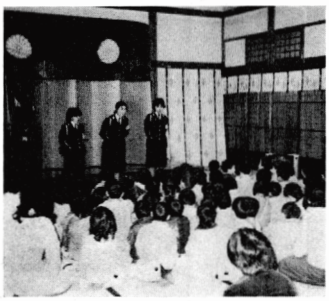
続いて、神職並びに年男達による〝鬼は外・福は内〟を唱え乍ら福豆を撒けば祈願殿前に陣取った園児達を始め参拝者多数が、右往左往の豆拾いに大わらわであった。寒さも吹きとんだようであった。

豆撒き終了後、清明殿に於いて、福岡県警宗像警察署のご協力により、祭典に参列した幼稚園児を対象に交通安全教室が開かれた。

同署の三名の婦人警察官による、やさしく、わかりやすく、指人形や厚紙で作った信号機を使ってのお話しに園児達や付添の保護者達も、今更のように、〝交通事故の恐しさ〟・〝交通規則を守ること〟の大切なことを感じ取られたようであった。

また、境内斎館前庭ではパトロールカーや白バイを見学して、終りに〝交通規則を正しく守ります、守りましょう〟と誓い合って、当大社から上げた紙袋に、拾った豆や菓子等を入れてちっちゃな手にしっかりもってそれぞれの学園に帰っていった。





宗像大社春まつり（保存会）御案内

春の大祭を左記行事日程で斎行致しますので、皆様方お誘い合せの上、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

昭和五十九年三月吉日

宗像大社宮司　葦津嘉之

記

三月三十一日	午後五時	高宮祭地主祭
同	同	宵宮祭
同	午後六時	総社地主祭
四月一日	午前十時	宵宮祭
同	午前十一時	第二宮・第三宮祭
		大祭第一日祭（氏子奉幣・風俗舞・浦安舞）
二日	午前十一時	大祭第二日祭・交通安全講社大祭
同	午前十一時四十分	献上若布採取者表彰
		宗像護国神社祭（南坊流小方社中）
同	午後二時	献茶祭（南坊流小方社中）
四月十四日	午後五時	沖中両宮宵宮祭
十五日	午前九時	沖津宮大祭（沖津宮遥拝所）
	午前九時三十分	御獄神社祭
	午前十一時	中津宮大祭
神賑行事		
四月一日	午前九時	奉納剣道大会（於境内―本殿側）
一日	午前九時	奉納吟詠大会（於清明殿）

以上

〔お礼〕

節分祭の豆撒きに際し、園児達が喜ぶような物を一緒に撒いて下さいと、左記の方々よりご厚志をいただきましたので、ご披露旁々当紙面をかりまして厚く御礼申し上げます。

花田商店
田中商店
かずや酒店
磯部薬局
岡山ファミリーストア
古部商店
ナカマル醤油
かねと呉服店
ヤマエ鮮魚店
吉井商事宮前給油所
遠藤クリーニング店
みなとタクシー（株）
中野　一氏
（以上玄海町）
梅月堂（福岡市）
谷口文具（津屋崎町）
なわた文具（宗像市）
ヨシオスタジオ（〃）

古代史探訪 (8)

生活根底である地域性を観る

宗像地方に存在していた古代生活址としての貝塚遺跡は、三〇〇〇年も前の昔にさかのぼり、縄文時代後期に属する玄海町鐘崎の「上八貝塚」と、六世紀の後半代に位置する古墳時代後期に属する、玄海町神湊の「浜宮貝塚」・「新波止貝塚」が知られているのみである。

浜宮貝塚の方は、砂丘の裏側は低湿地帯が拡がっていて、淡水産のシジミ貝類も多いが、神湊貝塚はすぐ裏が丘陵状を呈し、岩肌が露出している崖よりなりたっている。どちらも、奈良時代の土器類も多く出土していくと、現在の海抜5～10メートルのあたりであったといわれている。

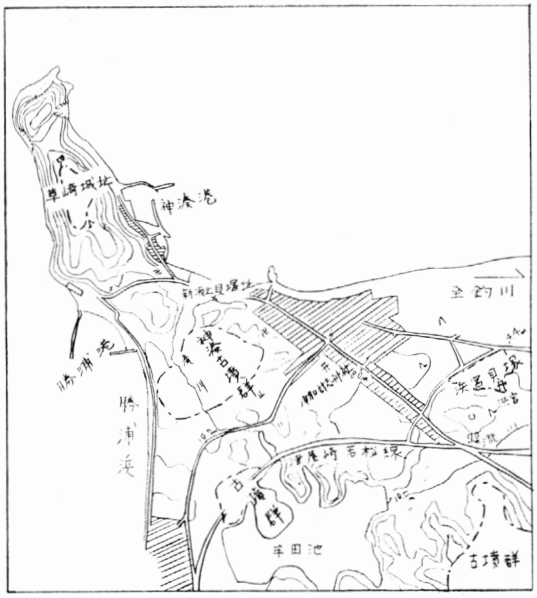
釣川流域に集中する弥生時代の集落は、古墳時代、歴史時代へと続く内陸の農耕を主とする民の基礎を作り上げていったであろう。

古代宗像族の発生において考えると、三面を山に囲まれ生活した人々は、潮流が激しい玄界灘の海上権をもにぎっていく、海浜部の漁狩民の海人集団と、平野部に生活拠点を置く農耕民との中間地点に居住していたであろう。宗像族はこの地方を統括していきながら、律令国家成立とともに、中央にも躍進を続けていった地方豪族として力を伸していく。この地域性は、後に宗像大神を斎き祀る宗形（胸肩）君が、これを生活基盤として地域を司裁していく宗像族の足跡を、振り返って考えるための大きな原点と言うことが出来る。

この浜宮・新波止両貝塚の土器類は土師器のしめる割合の方が多いが、須恵器は北九州第Ⅱ・第Ⅲ型式が主体である。この附近一帯では、潜水漁法を中心とした当時の漁村の生活をうかがうことが出来る。岩礁性のアワビ・サザエの貝殻を多くみる。

海岸砂丘や貝塚の後部地形状況を考がえてみると、釣川の河口は非常に広い。現在の海岸線より内陸に深く入りくみ、神湊の入江が深く孤をえがく内海型であったと考えられる。又当時の海岸線は地層から測定しており、集団で定着した生活のあとをみることが出来る。

宗像は、近年急速に都市型開発が進んできたが、それ以前では、支流を含くむ釣川流域の平野部一帯ではどこでも、弥生時代の生活遺跡の確認と、遺物を表面採集することが出来たと伝えられている。この中でも宗像市田熊遺跡（旧宗像高等女学校とその周辺）では、弥生時代前期から中期にかけての大集落があり、大形蛤刃石斧・扶入片刃石斧・石剣・石のみ・石庖丁などの出土をみている。



〈神湊海岸地図〉

H・M

歌集「夕きぎす」発刊さる

著者　宮下矩雄氏

御贖物やらいまつりて大年の　御門閉ぢをれば夕きぎす啼く

（註・贖物＝大祓式のときの災いをあがない祓うための人形（ひとがた）の類。大年＝おおみそか。きぎす＝キジの古称）

この歌は去る昭和四十年の宮中歌会始、御題「鳥」の入選歌で詠者は宮下矩雄氏である。

宮下氏は永年宮内庁に掌典補として奉職されている方であるが、当大社との係りも深く、昭和四十六年十一月十一、十二日の遷宮大祭には勅使の随員として来宮され、また例年、早春に行われている若布献上の折は、何かと御世話をいただいており、更に、昨年五月十五日、皇太子、同妃両殿下の当大社御参拝に際しては、その祭式につき親しく御指導を仰いだ方である。

氏は歌才にも秀でられ、宮中の月次の歌会には特に推薦されて毎月欠かさず詠進を続けられており、近年は朝日歌壇にも投稿され、難関の中しばしば上位入選を果されている。

今年、宮内庁奉職満四十年と還暦を迎えられるにあたりこのほど歌集を発刊された。題名は冒頭の歌会始入選歌の中の言葉から採った「夕きぎす」。序文は入江相政侍従長が筆を執られている。

作品は昭和四十年から五十八年までの宮中月次の歌会詠進歌を始め、朝日歌壇入選作や、著名大社奉幣祭奉仕の折の感懐を詠まれたものなど格調高い秀歌六百二首が収められている。

その中で当大社ゆかりの歌は次の十首である。

海北の道の鎮めの宗像の大神の宮美しくも竣れり

宗像の田島の原に千木高く海原しらす大御神はも

木綿襷十字十字に奉遷の装ひ凛々し宮司・権宮司

大わたの最中の神も辺津宮に合せ斎ひて大みてぐらを

沖の島出土の小さき金銅の織機は妙にくはしくもあるか

数知れぬ玉また鏡大わたの鎮めの神の高きみいつを

宴ひらく庭は今上大礼の主基斎田の候補地なりしと

金銅の五絃琴におもふわたつみの斎きはるけき筑前沖の島

グラビアの方格規矩鏡端然と沖ノ島学術調査報告書

この歌集「夕きぎす」はその掉尾を飾って、昨秋催された現代歌人協会第十二回全国短歌大会の栄ある大会賞受賞作品で結ばれている。

肌守と佩び戦ひし畑土を畑に返しぬ生きて還りし

昭和五十九年度　宗像大社奨学金　受給生選考委員会行わる

去る三月一日、当大社斎館に於いて、今春宗像郡市の九中学校を卒業、高等学校に進学した生徒を対象として給付される「宗像大社奨学資金受給生」の選考打合せ会議が開催された。

この奨学資金制度については既にご衆知の通り、昭和三十四年四月、皇太子殿下と美智子妃殿下とのご成婚を記念して、同年十一月に発足し翌年の昭和三十五年四月に第一回目が実施された。以来今年は第二十五回目を迎える。

特色としては、各中学校から男女不問二名づつ選出され、高等学校に在学する三ケ年間に亘り給付、また卒業後には一切の返還する責務は負わないことになっている。

当日は、宗像郡市の九中学校校長（玄海・大島・津屋崎・福間東・中央・日ノ里・城山・自由ケ丘）及び、当大社から葦津宮司と事務担当職員が出席のもとで会議が開催された。

葦津宮司は挨拶の中で、「…奨学年の選定は、各中学校長の推薦に一任するものであり、有為の社会人・真の日本人の育成を目的として設立された本奨学資金制度である趣旨を充分にご理解されて選考して下さいますように…」と懇請した。

発足当初は、資金は当大社の育英事業に協賛するために奉納された篤志家の浄財をこれに充て、資金より生ずる果実を奨学資金として給付された。また、各校一名で、月額壱千円であったが、途中より各校二名づつに増員し、給付金額の方も増額された。

現在は各校二名づつで、月額五千円（事務の都合上三ケ月分を年四回に分けて給付している。）を、当大社の社費を以ってこれに充てている。過去二十四年間で約二五〇名が卒業し、社会人として単立ち各業界に於いて活躍している。

ここに、「宗像大社奨学資金運営規定並給付規程」を抜粋しょう。

一、奨学金は宗像郡市中学校出身者にして高等学校（又はこれに準ずる学校）に在学する学生生徒に給付する。

一、当大社より給付する奨学金は宗像大社奨学金と称し国家社会の発展に貢献する有為の人材を育成する為その勉学を援助することを目的とする。

一、奨学金受給者が学業成績又は素行不良にして奨学金給付の趣旨に反すると認めた時は直に給付を停止し既給の奨学金の一部若しくは全部を返済させることがある。

一、奨学金受給者が病気その他の事故に因り長期間休学する場合はその間奨学金の給付を停止することがある。この場合本人又は保証人より当大社に届出るものとする。

以下略

昭和五十九年度　八幡宗像会　新年総会開催さる

―於門田会館（八幡東区）―

去る二月五日、八幡製鉄門田会館（八幡東区大谷）で八幡宗像会の昭和五十九年度新年総会が開催された。

総会は五十余名の会員出席のもと、当大社葦津宮司来賓として出席し、定刻の午前十一時三十分をややすぎてから開会された。先づ伊豆丸副会長の開会の言葉、安永会長の挨拶と続き、次いで本年米寿を迎えられた有田藤三郎氏、同じく喜寿を迎えられた山本敏美氏、大社重信氏、同じく還暦を迎えられた占部甲二氏、花田安男氏、阿部博明氏にお祝いの記念品が贈呈された。次に名越・今崎両新旧幹事より会務・会計報告がなされた後、来賓として出席した当大社葦津宮司は新年の御社頭状況及び近況の報告を行い参会者から支援の拍手をいただいた。

以上で予定の式次第も全て了え名越理事の閉会の言葉にて会議を終了した。

次いで懇親会に移り出席者最高齢者九十才を迎えられた大和藤三郎氏の乾盃の音頭により宴が開かれ、全会員の楽しい談笑のうずの中、会員相互の動静等をかたり合い、一層和やいだ雰囲気を増し午後三時すぎ宴を了えた。

八幡宗像会は、現在会員八十名余であり、終戦後再編され、宗像市および宗像郡に関係ある八幡東区西区に在住する者若しくは勤務する有志の方々で組織され会員相互の懇親を計り慶弔を行い、宗像大社秋季大祭には家族伴々参拝することを主目的として活動をされている。

例年年頭に総会が開催され、初夏に当大社参拝及夏季懇親会、十月当大社秋季大祭参列と、年三回の恒例行事を中心に役員会、理事会、地区会等の小集会を随時開催され会員相互の親睦をはかっておられる。

◇　◇

〈昭和五十九年度役員名〉

名誉会長　岡崎　春雄
会　長　安永　義紹
副会長　大和　健示
〃　伊豆丸光男
顧　問　占部真太郎
理　事　深田　健三
〃　正野　満二
〃　高田　四郎
〃　安川　浄生
〃　小嶋　清美
〃　蔵野　公昭
〃　金丸　正史
〃　立花彦一郎
婦人理事　永島　好子
〃　中嶋ヨネ子
〃　古野由美子
幹事（理事）今崎　一雄
会計（〃）中野　好光
監査（〃）名越　五郎

▲事務所
八幡東区末広町十一―十八
今崎一雄幹事宅

当大社奨学金受給生よりお礼の便り

長かった冬もようやく春めいてまいりました。

さる三月七日無事に高校を卒業することができました。私にとりまして、高校の三年間は、とても有意義にすごすことができました。本当にありがとうございました。

まだ大学の合否はわかりませんが、どちらにしても これから日々精進して、立派に社会人になるよう努めていきたいと思います。

宗像郡福間町東福間団地
C―一〇九
橋本千恵
昭和五十六年度生（第二十二期生）

宗像大社中津宮（筑前大島）　旧正月　大漁祈願祭斎行

厳寒の去る二月二日午前十一時、筑前大島に鎮座する宗像大社中津宮に於いて旧正月祭並びに、大漁祈願祭が厳粛に斎行された。

大島村は村民の大部分が漁業に従事して生活をして居るところである。

大海で漁をする上で、新月・満月の日の潮の干満時刻が重要視される。これを知るには、大除暦（旧暦）が適していることから、旧正月祭が斎行されてきているのである。ほとんどの祭典は旧暦で行われ、宗像三宮の内ここ中津宮だけでの祭典である。

当日は、沖中両宮奉賛会役員、大島漁業協同組合組合長、同組合員が多数参列のもとで厳粛且つ盛大に斎行された。

祭典終了後、引続いて昨年一年間に当大社沖・中両宮に献魚、献品等を幾度となく奉献された敬神の念厚い方々に感謝状と記念品が贈呈された。

その後、海辺に近い当宮照海殿に於いて、参列者多数が列席のもと盛大な直会が催された。

沖ノ島出土香炉状品についての再考

現状観察の報告

龍は中国古代から神秘力を有する想像上の神話的動物であり、常に神霊視され、神獣として尊とばれ、信仰の対象とされてきている。各時代ごとにその文様体は異なるが、生活用品・工芸品の文様としても数多く用いられてきている。中国においても仏教が盛行してくると、龍神は仏法守護の八部衆の一つとされ、仏像を安置する石窟等の入口の龕に、仏院区域内の守護、仏像保護を目的に、龍を飾りとして刻み込んでいる。

北魏時代（三八六―五一九年）敦煌石窟・大同石窟・竜門石窟等の龕の龍の様式は、上唇が舌状で長く上方に屈曲し、下唇は短く屈曲はしていない。角は一角が多く、耳が長く、大きく突出しているのが特徴とされている。

中国北魏時代（六世紀頃）に彫刻された、雲崗石窟第七洞「王室・明窓拱梁龍形」に沖ノ島出土の香炉状品の双龍文様帯が相似しているようであり、四号遺跡の他の出土品からも考えて六世紀代を下ることがないと思われる。

龍頭に関してもその用度は、中国における土着信仰が変動し、インドより仏教伝幡後は、仏法守護の竜神信仰として、龍そのものの存在が変化してきていることとは同様である。龍の所持する大いなる力が作用し、用度も多様化されると共に、時代の変遷と共に現実視され、段々装飾化されてきたことはうかがい知る。

ここで香炉状品が奉献された祭場であり、その出土地でもある四号祭祀遺跡についての概要を再度添えてみる。

四号遺跡は、巨岩を主体とする祭場の入り口部に存在する遺跡で、高さ10メートルよりなる巨岩の基に形成されている。この祭場は洞穴状を呈しており、奥く行き八メートル・巾二メートルを測るが、頭高が低く、途中でL字形に屈曲して五号遺跡へぬけ出る。この四号を語る場合沖ノ島祭場そのものが、「沖ノ島の御金蔵について」と言われているように、多くの人に知られてきている祭場である。ここ四号遺跡よりの出土品をみると、他の祭場の奉献品を移集し、保管又は収納場所として、用いられていたことも考えられるように、多種類品に亘っている。

祭場よりも、下部である地盤まで堀り下げていくと、縄文時代の生活用品の包含層が確認出来る。出土品からみると縄文時代前期にあたる九州曽畑式（BC三〇〇〇年代）系統の土器類の他に生活用具がみられる。ここ沖ノ島は他の地も含めて定住生活根は不明であるように、季節的な漁労生活が太古では行なわれていただろうが、大和朝廷成立期を前後して変動したことは考えられる。

このことはさておき、祭祀奉献品は初期的段階より、近世の物までが多く納められている。しかし、祀りそのものが行なわれた時期は、六世紀後半代の岩陰祭祀の時代であろう。

祭祀奉献品を列記すると、漢式鏡をはじめ香炉状品・金銅織機・雲珠等馬具類・滑石製形代類・銅盤・宋銭・江戸時代の用品等、各時代のものをみることができるが、やはりここでの祭祀そのものは、出土品の主要を占る六～七世紀代に設置することが出来よう。

（つづく）

写真は四号祭祀遺跡

H・M

宗像大社歌会
俳句作品集（二五三）

津屋崎　井浦　良介

海病める二月煙突ばかり殖（ふ）え

田　熊　安部　ゆき

歩くことなべて生甲斐息白し

福　間　広渡一寿軒

草むらに春見つけたり捨（す）て鏡（むしろ）

鐘　崎　岩瀬　辰夫

冬の海戻り来る漁獲（りょう）如何に

東　京　白木　静江

人傳ての話ほどなき小火（ぼや）の家

田　熊　力丸　一郎

水仙の花のふるえの活けて止む

藤　沢　井上　玄洋

山里の目覚めはおそし梅の花

香　椎　板矢クニコ

春一番吹けば故郷の島思う

福岡西　入江　柳江

春炬燵はなれることなく暮れにけり

福岡中央力丸ゆずる

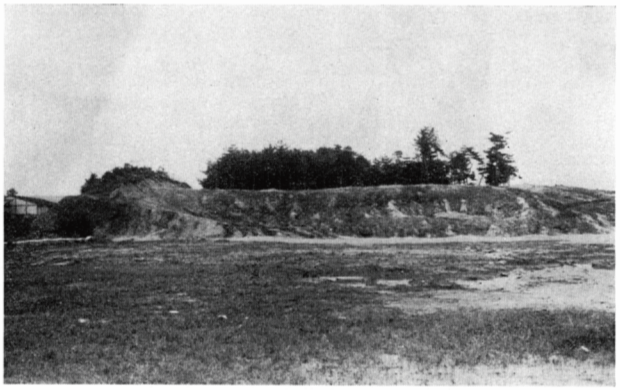
心また閉すごとくに冴え返る

玄界沿岸地名探訪（2）

花見（はなみ）

（粕屋郡古賀町花見
宗像郡福間町花見）

いしいただし



まず、地名探訪のトップは私の住んでいる花見からはじめます。

花見は現在、宗像郡と粕屋郡とにまたがった町名があります。宗像郡は福間花見・粕屋郡の方は古賀花見と呼んでいます。

筑前続風土記には「席内（むしろうち）村の境内・海辺にあり」とあるので、粕屋郡古賀に属しているとがわかります。ここに花見の由来の、花見山というのがあったのです。続風土記をつづけて見ましょう。

「此山は、只砂の高き岡也。山とは称し難し。しかれとも、是に登りて眺望すれは、海陸の諸山広く見えて佳景也。むかし此辺藤花甚多く、松樹に延せり。大友氏豊後より爰に来り、此山に登りて、藤花を見し故に花見山といふ」とあります。

この花見山というのは、宅地になって削平され、現在は残っていませんが、西鉄バス名糖前から、福岡側南へ約三〇〇メートル、最近開業したライオンパチンコ店の後方で、花見グリーンタウン（住宅都市整備公団）の一画にあった山です。続風土記にも記されているように「山とは称し難し」というように、砂丘の中で一番盛りあがったところであったのでしょう。住宅が建つ前までは、砂丘の断面が残っていましたが、2・3メートルと砂が覆い、その下は赤土層となっていて、砂層と赤層と赤土層のところが、弥生時代の土器片がありました。

花見山の上には、大歳宮（おおとしぐう）が祀られていました。

大歳宮の由来は、元文年間（一七三六～一七四〇年頃）に、吉田栄年によって、ここに祀られたといいます。

その大歳宮は、戦後、久保の若宮八幡宮に合祀されてしまい、その後は花見山と共に造成されてしまったのです。花見に住む林勝彦氏（古賀町花見）は、「高さは標高一五・六メートルはありましたでしょうか、松林の中では一番高いところでしたなあ、大歳宮まで、石段がついとりました。大歳宮のまわりには大きな松が繁っていましたが、頂上はむかしは古墳があったといわれとりました。そりゃ、ここからの眺めは最高でしたなあ、福間側は急傾斜になった坂でした。花見山は昭和四〇年代まで残っとりましたが、その後は造成され消滅してしまいましたなあ、残念なことです。」

花見の地名の由来は、ここへ来た大友氏が藤の花を見たところから、つけられたものです。

藤はマメ科に属し、ノダフジとヤマフジに分けられます。野山に多い落葉のツル性木で、色は紫と白があります。

海岸の松林と藤とは一見結びつかないようですが、私が古賀の花見に住んでいた頃ですから、もう一〇年ほど前になりますが、浜山あたりの松林の中で、砂地に藤が低くはったものをよく目にしたものです。

現在、この続風土記の情景をよく残しているのは、福間側の花見です。福間花見の九州変圧器の横側の小路を、オシオイミチと呼んでいます。その南側の松林に、藤が松にからんだものが見られました。

大友氏が花見で見たものは、このように松に藤がからんだものだったのでしょう。藤の花が咲く頃になると、ここを通って、いつもそのように思っていました。この近くに、九州大学の中村正夫先生が住まわれていますが、先生も同じようなことをおっしゃってありました。

藤は古事記・日本書紀にも記載され、万葉集にも、藤を詠んだ歌が二一首ほどあります。その万葉集で想起するのは、巻三の二一三〇の、防人司佐大伴四縄が、太宰府にあって、旅人に献じた歌とされるものです。

藤浪の花は盛りなりけり
平城の都を思ほすや君

折口信夫の訳によりますと「波の様に咲いては揺れている、あの藤の花は、ちょうど今が真盛りになった事だ、嘸、あなたは奈良の都を思い出して入らっしゃるでしょうね」というものです。遠く離れた故郷とも、いうべき京の藤を、旅人に問いかけながら、同じ都への思いをさそいかけているのでしょう。

大友氏が花見をした事実はどうであれ、人々が藤の花をこの付近で多く目にしたところからの、由来にほぼまちがいないでしょう。

余談になりますが、この丘陵から（グリーン花見の造成中に古墳時代の木棺墓が発掘され、そこから鏡や琴柱形（ことじがた）石製品等が出土しています。その南側・東花見の松林は、オオツカダンと呼ばれていたそうです。オオツカは大塚とも考えられ、古墳と結びつく地名の存在が考えられます。その近くに花見古墳があり、横穴式石室を有し、鏡・銅鏃・金銅装刀子等が発掘されています。

沖ノ島・国の鳥獣保護区に指定

沖ノ島は、古代史を探究する宝庫であり、現代もなを引き継がれている風習と風俗等を考え合わせると、民族学上でも学問研究の基となることが、良く知らされてきている。一方鳥獣・植物類が属する生物学上においても、秘境的存在であることは忘れることはできない。

昭和五十九年三月三十一日告示をもって、環境庁から「国設鳥獣保護区」に指定される。

二月十七日に環境庁の諮問機関である、自然環境審議会の内の、自然環境保全審議会鳥獣部会（福森友久部会長）を開き、天然記念物のカンムリウミスズメ・カラスバト、など野鳥の集団繁殖地であり、当大社の神の島である沖ノ島及びその属島（小屋島・三円柱・天狗岩）を含めた全域を、指定地とすることを決めて上田環境庁長官に答申しています。これを受けて、同庁は三月三十一日より向こう二十年間を指定期間として、沖ノ島を三十八番目の国設鳥獣保護区に指定するようである。従来国の指定地は、国有地を原則として、五十年度より民有地もその枠内に入れ自然保護に務めるようになった。

沖ノ島の近海は、対島暖流の流れがとりまき、島内には亜熱帯性植物であるビロウ樹やオオタニワタリ・ナンバンキシブが最北限の地であるが、ダブノキの群落をはじめ、モッコク・ヒベラ・ナタオレノキ・ヒゼンマユミ・ミヤコジマツヅラフジ・ムサシアブミ等これまで当大社が神域として、太古から続づけてきた、狩猟の禁止、樹木の伐採や建造物構築に関する件で条項が厳しい「特別保護区」に設定されるので、全ての面でも環境庁長官の許可を受けなければならなくなる。この決定に基づき、これらを含めて八五科二一二属二七九種の植物相が群生し、照葉樹林帯を形成していることが、福岡の生物部会による再度の調査により、記録されてきている。

又一方鳥類は、天然記念物のカンムリウミスズメ・ハトの中では一番大きい、日本固有種で天然記念物のカラスバトをはじめ、ヒメクロウミツバメ・ツグミ・シジュウガラ・トビ・オオタカ・メジロ・ハヤブサ・ヒメウ等が生息し、ウミウの営巣地としても南限を示している。鳥相は変化に富み、春・秋の渡り鳥のシーズンとなると、それぞれの休息のための中継地ともなっているため、オオミズナギドリ・ツル・サシバ・ヒヨドリ・ゴイサギ等季節ごとに羽を休めている。これらの種類は、近年（財）日本野鳥の会北九州支部のメンバーの渡鳥調査により、一二八種五亜種の鳥類が確認されている。

沖ノ島は昭和三十九年十一月に、福岡県では鳥獣保護区に指定している。自然保護の声がほうぼうで高まっているが、この保護期間が切れることを機に神域として守りつがれている沖ノ島も、今回の運びとなっている。

ここに生物調査の記録の一部を記載しておく。

＜註＞

沖ノ島の植物生育相

竹内　亮　一九三二　福岡県生物学雑誌

沖ノ島生物総合調査報告

黒木茂・林宏・吉田博　一九六六　生物福岡

一九七七　北九州野鳥の会

福岡県の自然四　福岡県の野鳥

一九七八　福岡県の自然を守る会

仝　右　五　沖ノ島の自然を守る会

仝　右　一九七七　北九州野鳥の会

福岡県生物学雑誌

一九七四　福岡県高等学校生物部会

筑前沖ノ島付属島小屋島のカンムリウミスズメ・ヒメクロウミツバメ繁殖地における人為的被害に関する実態調査その一

一九七六　北九州野鳥の会

仝　右　一九七七　北九州野鳥の会

福岡県の自然四　福岡県の野鳥

一九七八　福岡県の自然を守る会

仝　右　五　沖ノ島の自然を守る会

一九八三　福岡県の自然を守る会

文化財についての考え（17）

楽　松　子

宗像大社旧境外摂社
孔大寺神社祭斎行さる

去る三月二日、孔大寺神社（玄海町池田鎮座）の春の大祭が斎行された。

孔大寺神社は、当大社の旧境外摂社で、宗像郡の東北、遠賀郡との境にそびえ立つ四ツ塚連山（城山＝じょうやま、金山、孔大寺山、湯川山）の最高峰孔大寺山（標高四四九米）の山腹に鎮座する。その春の大祭には当大社から神職が献幣することになっている。

当日は、近年になくあちこちに残雪があり肌寒さが感じられた。参道入口からの長い石段を登り途中で振返ると玄界灘と宗像郡内が一望に見渡せた。

祭典は、午前十一時から地元玄海町池田区の氏子等十数人が参列のもと厳粛裡に斎行された。

特別授与品として赤い実のついたアオキの小枝に小さな草履（地元の氏子が作ったもの）をつけた魔除け守りが参拝者に授与されていた。

また、疫病退けに御利益があると伝えらており、当日のために用意された約そ一五〇体全部が、みるみるうちになくなった。

一年に一度の祭典が無事終了し、神職並びに氏子等は、共に社殿をあとにし、下山した。麓の公民館で直会が行われた。

（二面より　つづく）

神　湊　葉山　道子

オーストラリヤより息が買い呉れし黄の毛布雪降る宵の夫に掛け添ふ

池　田　占部ユキ子

宝くじそろへ置きあり帰りたる子の机の上片附け居れば

上　八　占部　元子

廃業となりし医院の玄関にプラタナスの葉の吹き溜りいぬ

田　島　田中ツタエ

節分の福笹を背に横断の翁ひとりに車つらなる

神　湊　石丸　国子

買物の袋の重み腕に伝う廃車せしこと何かたのしく

江　口　小林万里子

小鳥来て啄みゆきし赤き実の寒の頃よりいさぎよく減る

田　久　加来　幸夫

美しく老いんと期すをあな愚か他人（ひと）の外套を着て帰りたり

大　井　吉田　和子

寒の水澄む甕の中沈みゐる丸餅いくつ白きかげもつ

東　郷　田中　春子

休日には訪ね来るらし子を思ひ茄子の味噌漬残して置きぬ

古　賀　吉武　邦夫

知る人の大方絶えし里村の八幡山に囀ぎて佇てり

鐘　崎　安永　久子

しゃくなげの気高く咲きじ湯の駅にひかれて訪いし

王　丸　小方　正人

幼児等（とら）の打つ太鼓の音は春めきぬ雛祭り近き雪解の庭に

渡　内田　久美

物置の鍵の上にもそれなりに雪の積もりて美し今朝は

武　丸　原田　リノ

ふる雨は雪となりゐし犬鳴の山は霞めど今日は晴れを